
ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N - 過去編

オオガラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

iJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE 2 ANOTHER AGE - A

I・N - 過去編

【Zコード】

N7876Z

【作者名】

オオガラス

【あらすじ】

その人が傍に居たから、自分はまだ、ここにいる……

レイヴン

あの時の事を 今でも覚えてる

初めて乗った AC

初めて握った レバーの感触

初めて嗅いだ 硝煙の匂い

そして …

初めて人を殺した 瞬間

『驚いたな……』

人を殺した でも それを咎める声は無い

あるのはただ 驚嘆の声だけ

レイヴン試験

レイヴンになるための通過点

要するに 人殺しになれるかどうかのテスト

今行われているのは まさしくソレ

テストの内容は単純

市街地を荒らし回っているMTの排除 これだけ

そのバカを
たつた今
破壊した・殺した

『お前の年齢でこれ程ACを操れるとは……』

回線越しに聴こえる男の声　～テストの試験管

手助けはしちゃくれない
失敗したら死ねと言った

この男もまた
レイヴンたった

……解った。実力は十分にあるようだな。

元スケートの終了　同時に男の口から発せられた

レインになるとたまたま記憶が戻る

新しい人殺しを歓迎する言葉 レイアンの謎

読みよ
君の力を
今この瞬間から
君はレイアンだ

自分が人殺しの仲間入りをした
今日がその記念日

男の子と女の子が立っていた

向い合わせで 恥ずかしそうに

男の子が 意を決して口を開く

「前編」の題名は？

女の子が嬉しそうに微笑んだ

和には

爆発

女の子の悲鳴 男の子の悲鳴

男の子が手を伸はそひとして

瓦礫の雨か
それを遮った

「君の両親は亡くなられました」

「…………えつ？」

「AC同士の戦闘に巻き込まれました

即死です」

10歳になつたばかりの頃

唐突に突き付けられた言葉

病院のベッドの上で告げられた

見知らぬ人からの言葉を

小さな頭で理解するまでに

長い長い時間を必要とした

「今日からここが　君の家だ」

退院してからすぐだつた

そこもまた　見知らぬ場所

「…」

「君の　家だ」

静かに　噛み碎く様な言い聞かせ方

そして　他の質問は一切許さずに

強引に手を引かれ　中へ連れ込まれた

その　孤児院とは名ばかりの

豚小屋のような 最悪な場所に

いや 豚小屋の方が まだマシ……

「……………」

そこは まさに地獄だった

「離しき……………」

人権無し 安らぎ無し そして 人で無し

こんな所にいるべからざら 死んだ方がマシ

雨の降りしきる中 そこを逃げ出した

「いたぞ…………」

「ハハハちだー 逃がすな…………」

後ろから聞こえてくる男の声に

怯えながら それでも足は止めない

息は切れ切れで 心臓は痛くて苦しい

でも止まれない 捕まりたくない

速度を上げる 息が切れる 足がもつれる

裏路地を走る 曲がり角を曲がり ひたすら走る

あの場所を逃げ出してから 1年近く経つ

現状は あまり変わってはいなかつた

要するに いつ死んでもおかしく無い

「//」を漁り 物を盗み ただその口を食い繋ぐ

そして 今日……

「見つけたぞ！！！」

ついに 見つかつた

「あッ」

後ろを振り向き走りだす

焦りで足が絡まり転んだ

でも寝ている暇なんてない

立ち上がりて駆け出す

足が重い

目の前が揺らぐ

息が出来ない

そして …

「ああー。」

…道が…無い

「…あ…あ…」

壁にしがみつく

爪を立てて壁をよじ登る

「くつ……！」

ダメだ 何度やつても登れそうに無い
手が滑つて掴まれない 指も掛けられない

「！」の先は行き止まりのはずだ！－！－

「あつちだ！ 追い詰めたぞ！－！」

2人の男の声に 小さく悲鳴を上げた

捕まる その結末が目に見えて

歯をガチガチ鳴らして震えていた

「……あつ……あ……や……」

嫌だ 捕まりたくない！

嫌だ 嫌だ 嫌だ！！

「あの先だ！」

迫る声 足音 人影

震える体 手 足

もう一歩も動けない

「ほり

それは突然だつた

「……えつ？！」

壁の上から差し伸べられる手

「掴まれよ 追われてんだろう？」

あとはがむしゃらだつた

その差し出された手を掴んで

壁を蹴つて蹴つて滑りながら

それでも蹴つて壁を登つた

「あつ あれつ？！」

「……消えた」

壁の向こうから聞こえてきた

今まで追つてきてた男達の

呆然とした呟き

「…おじさん…だれ？」

見知ら人に抱きかかえられながら

裏路地から 日の当たる表通りに出た

「お兄さん…だろ？」

不機嫌そうにその人は言った

「……おにい…さん？」

だから言い直した そしたら笑つた

嬉しそうに笑つて 頭を撫でてくれた

多分初めて 誰かの優しい手に触れた
気がついたら 泣いてた……

そのお兄さんは レイヴンだと言った
「レイヴンってなに?」 つて聞いたら

お兄さんは笑いながら 「強い奴の事だ」

つて言った 「なにする人なの?」 つてまた聞いたら

今度もまた笑いながら 「何でもやるよ」 つて答えた
だから言つてみた 「……だつたりや」

お兄さんは首を傾げて 「ん?」

「ハンバーグ作つてよ!」

「……ハンバーグ?」

お兄さんは ちょっと困った顔をした

「できないの……?」

悲しくなった ウソツキかと思った でも

「OK 楽勝だ」

つて書つて作つてくれた……嬉しかつた

でも……

「ウフ……」

ハンバーグは……マズかつた

それから そのお兄さんと暮らす事になつた

始めはひよつと バラじて良いのか解らなかつた

だけど すぐ慣れた とても楽しかつた時間

そのお兄さんは 家に帰つてこない時もあつた

その時は寂しいけど 必ず帰つてくれた

帰つてきた時は 本当に嬉しかつた

それから1年が経つた

いきなりお兄さんが書つた

「ケリを付けてくる」

何の事が解らず　ただ頷くしか出来なかつた

でも 必ず帰つてくる そう思つていた

頭を撫でてから む兄さんは出でいつた

お兄さんの帰りを ただ待つた

いつまでも いつまでも……

でも いつまで待つても 帰つて来なかつた

行方不明だと言われた 死んだと聞かされた

そしてまた 一人になつた …

少しして知らない人が來た

この家の場所を使うんだと言つて

そこを追い出された また元に戻つた

帰る場所も無くなつた 待つ場所も無くなつた

… 何も…無くなつた …

その日の残飯を漁つてる時だつた

知らない男に声を掛けられた

またアイツらかと思って走りだした

でもダメだった 腕を掴まれた

「見つけました」

端末越しに 男は誰かと話をしていた

「はい 恐らく」

見下ろす男の顔は無表情で

とても怖かった 震えていた

だから逃げ出そうと暴れた

でも 全然振りほどけなかつた

とても力が強かつた 人間じゃないみたいに

「解りました」

その男は頷いて 誰かとの話しを終えた

ああ もうダメか そう思つてたら

「君は」 その男はしゃがんで言つた

田線を同じにして でも その田が冷たくて

とてもとても怖かった

「一緒にいた人に 会いたくはないかい？」

それがお兄さんの事だつてすぐに分かつた

だから頷いた 何度も何度も頷いた

「……会いたい」

「どうしてるか 解るのかな？」

「……解らない」

「だったら 探せば良い」

「どうやって？」

「レイヴンって 知ってる？」

「……うん」

「だったら君が レイヴンになれば良い」

「……なんで？ 無理だよ……」

「もしレイヴンにならなければ そのまま死ぬだけだよ？」

「…………嫌だ…………」

「君を助けてくる人は もういらないんだからね」

…………嫌だ……死ぬのは 嫌だ……

「…………レイヴンになる」

「良い子だ」

男はそう言つて 頭を撫でてくれた

でも その人の手は 酷く冷たかった……

そして 5年が経つた

一発の銃声が鳴り響く

それに続き 3発のミサイル

次々と目標となる敵に直撃し 破壊する

溜息を吐く 緊張がよけやく解ける

動く物が何も存在しなくなる 自分以外

そのまま踵を返し その場を後にする

依頼を一つ達成

あれから5年 レイヴンとしての実力も上がりそれに連れて 名前もそこそこ売れ始めていたこの年でレイヴンって言つ珍品扱いもあって企業からの依頼もぼちぼち来るようになり一人でそこそこ稼げるようになつていたでも 探している人は もう見つからない……レイヴンをやつしていくお兄さんの事を知った? レオス・クライン? と言つ男を追つて衛星? フオボス? に行き そして消息を絶つた恐らく すでに生きてはいないのだろうでも A Cから降りるなんて今更出来ないだから今日も 何かを奪い殺すのだろうあの時から 何も変わることも出来ず……

『君に この依頼をお願いしたい』

バレーナ社からの遣いの男 今回の依頼主

『LCCが所有していた この建物の調査だ』

目標の場所と 時間と 依頼内容を告げた

『難しい依頼ではないと思うが どうかな?』

ただの調査 こんなに簡単な依頼を受けない手は無い

「解った 引き受けん」

『よろしく頼む』

目標の建物は? アーデンリバー? にほど近い場所にあった

到着すると すでに10機近くのMTと1体のACが待機していた

なんだこの大部隊 大袈裟すぎやしないか?

そんな事を考えていると 1機のMTが近寄つてくる

「話しあは聞いている 君がもう一人のレイヴンだな?」

「ああ そうだ」

「良しこれで揃つたな では出発する」

短いやり取りを終えると 大行進が始まった

A C組は M T部隊の最後尾につくことになった

調査は何事も無く順調に進んでいた

依頼内容は調査だったが実質は護衛だった

M T部隊が調査の大半を引き受けていた

だからそれを ボーつと眺めていた

不意にもう一人のレイヴンから

不躾な呼び方で声をかけられる

「おい ボウズ」

自分に向けられた呼びかけだと

理解した瞬間 反射的に口から出た

「……なんだよ オッサン」

それが あの人との出会いだった

出合い

「オッサンね……」

男は鼻を鳴らして呟いた

「なんか用？」

ぶつきりぱつに言つてやる

ガキ扱いする奴は嫌いだ

「お前に一つ忠告」

「……なに？」

「もし死にたくなかつたら 気を抜くな」

「……じつじつ意味？」

「すぐに解るや」

忠告なんて される覚えもない

ましてや今の実力なら余裕だろ

自分の力を過信していた

だからオッサンの言葉も

当たり前の様に聞き流した

外周をMTが調査し終えると

今度はAC組の出番だつた

建物の中を端から端まで調べ尽くす

そこは 何の施設だったのか知らないが

かなりの大きさと広さを有していた

だが 動いている物は何も無く

ただ 重く鈍い足音だけが響いていた

「 … よし しかし今は異常は無い」

「 いじらりも異常無し」

あらかた見て回つたが 結局何も見つからなかつた

『了解 その辺で良いだろ』

隊長機のMTから無線が返る

程なくして 調査の終了が宣言された

「今回の調査 何が目的だつたんだ？」

『これだけの大部隊での調査 普通では考えられない

あまり人様の事に首を突っ込むもんじゃ無いけど

どうしても氣になつてしまつた

『……ああ 気にするな』

「なんで?」

『良いんだ 何も無いのなら それで』

まあ 当たり前だけど 何も教えてくれなかつた

『調査は終了だ いそげられてくれば 満い次第 帰還する』

「……解つた」

そこで この通信は終了……の筈だつた

通信を終了しようとした瞬間 ほんの少くはあるが

確かに爆発のような音が聞こえた 何だ?

『どうしたー? 何があつたー!』

隊長の男の 驚きと焦りを伴つた叫び声

「一体 何が起きているんだ？！」

「どうした？！ 何かあったのか？！ もうきの爆発は？！」

『……レイヴン！ 大至急こちらに来てくれ…………』

「どうした！？」

『は……早くー！ ヤツジが……ヤツラが…………！』

そこで通信は途切れた 聞こえるのは耳障りなノイズ

「何か起きたみたいだ！！」

隣のレイヴンに話しかけようと 振り向いた時には

「先に行くぞ」

すでに飛び出していた

「……あつ……何なんだよ一体……」

舌を打ち、ぼやきつつもその後を追う

そして MT の部隊が待っているであろう場所に到着

「なんで！？」

そこには MT のカタチなど一つも無く、ただ残骸が転がっていた

「何があつたんだ！？ 誰か！！」

呼びかけに答える者は誰もいない

機体からはまだ 煙が立ち昇つている

たつた今まで戦闘が行われていたように

突然の轟音 その正体を理解する前に

真横に突き飛ばされていた 尻餅をついた

「何す……！？」

突き飛ばした相手に文句を言おつと 真横を見た

まさに田の前を 今までいた場所を何かが通過した

「いつまで寝てる氣だ サッサと立て」

一瞬 何が起きたのか理解できなかつた

呆然と 田の前のオッサンの乗る機体を見上げる

「何：が？」

オッサンは答えない ただ睨みつけていた

？何か？が飛んできた方を ジツと見ていた

立ち上がりつて オッサンの見る方に田を向ける

「…………何だ……あれ？」

そこには 3体のACが立つていた

でも そいつらの機体構成が不明だつた

今まで見たことも無いパートで構成されていた

そして 3体とも同じ配色をしていた

氣味の悪い 血の様な赤と 閻の様な黒

「やつぱりな……」

オッサンが呟いた

「アレを知ってるのか！？」

その問いに オッサンは答えなかつた

代わりに鼻で笑うと続けて言つた

「また出やがったか」

そつぱりや否やマシンガンを撃ちながら

赤と黒のACに向かつて疾駆する

「…お…おい…！」

イキナリ事態は急展開

何が起きているのか理解も出来ない

でも ボサッと立つてゐる訳にもいかなかつた

破裂音と共に迫る 2つのミサイル

そして 1体の赤と黒のAC

「そつちは任せたぞ！」

はい！？ 思わず目を丸くする

「任せたって……え！？ エエーーー？」

突然の幕開け 何も解せぬまま戦いが始まる

しつこいく追つてくるミサイルを

何とか回避したのもつかの間

轟音が響いたと思ったら

次に巨大な火の塊が襲つてくる

レバーを引いてブーストダッシュ

全速でその場から後ろへ下がる

「うわっ！――！」

足元で火球が弾けて機体が吹き飛ばされる

「グ…グレネードランチャー？！」

爆風で舞い上がった土煙で 視界が遮られる

薄つすらと 土煙の中に巨大な影が浮かび上がる

何なのか解らない 突然現れた？それ？に向けて

右手のプラスマライフルを出鱈目に撃っていた

だが 今まで確かにそこにあつた影が一瞬で消える

「…ビ…ビ…ヘ…？」

音が聞こえた 空気を焦がすような音

「えつ？」

振り向いた時には遅かつた

「……えつ？」

長く赤いものが振り上げられていた

「…ブレー…ド?」

頭が認識を拒否し 心が麻痺していた

現実を直視することを拒絕した

「…で本当なら 死んでいたのだろう? …」

「やつちは任せたぞ!」

鈍色のACの中で男は 未熟なレイヴンに向けて叫んだ

赤と黒のACは 鈍色のACを挟み込むように展開した

鈍色のACはその場で佇んだまま 身じろぎ一つしない

赤と黒のACは ほぼ同時にグレネードランチャーを撃つ

だがそれを読んでいたかのように 鈍色のACは宙に飛んだ

行き場を失ったグレネード弾はそのまま直進する

赤と黒のACは お互いが放ったお互いのグレネード弾を

これを何事も無かつたかのように回避する

それを狙っていたか 動きの止まつた赤と黒のACへ

鈍色のACは頭の上に着地して そのまま踏み潰す

赤と黒のACは その重みに耐えられず地に伏せる

鈍色のACは 地に伏す赤と黒のACに向けて

左腕のブレードを振り上げ そして叩きつけた

右手のマシンガンを放ち もう一體の足を止める

ブレードでコアを貫かれた筈の赤と黒のACが

鈍色のACに向けてグレネードを構える

不可解だった 通常であれば中の人間は死んでいる

その筈なのに赤と黒のACは 未だに活動を続けていた

それを 鈍色のACは当然と受け止めていた

赤と黒のACが構えたグレネード その砲身を掴み

放たれる前に斬り落とした そしてマシンガンを

地に伏した赤と黒のACに向けて銃口を構える

「良いから 寝てろ」

2度3度 機体が跳ね上がるかの様に暴れた

沈黙した機体を見下ろす その目は何処か悲しげだった

次に男は顔を上げて そして舌を打った

片割れのACが 赤と黒のACに背後を取られていた

マシンガンを構え 男は大声で叫んだ

「伏せろ！！」

「伏せろ！！」

その声に 頭よりも体が反応した

機体をその場にしゃがませると

赤と黒のACに 銃弾の礫が幾枚も

幾百幾千も火花を撒き散らしている

それでも赤と黒のACは動きを止めない

「ぼさつとするな！ 動け！！」

オッサンの声に反射的に右手の武器を構える

プラズマライフルを赤と黒のACに撃ち込んでいた

この至近距離 まず外す事は無い絶対の射程

だが そんな甘い考えを打ち破るように 機体が消えた

「そんな？！」

有利得ない！！ ほとんどゼロ距離からの射撃

それを躊躇なんて絶対に不可能なはずだ

でも赤と黒のACは それをやってみせた

余裕の動きで距離を離す まるで馬鹿にする様に

次は当てる 敵をロックする FCSが敵を捕らえる

ロックオンマークが表示される だから撃つ

でも 当たらない

「なんで！？？」

ロック 撃つ ロック 撃つ ロック 撃つ

「当たれ！ 当たれ！？」

今までやつしてきたように

赤と黒のACにロックして撃つ

ちやんと狙つて引き金を引く

出來てるちやんとやれてる

なのに全てを躰された

まるで当たり前ない

「……な……んで……？」

ちやんとロックしてゐるじゃないか……なのに……何で……？

声を上げていた 絶望に叫んでいた

まるで駄々っ子の様に泣きじやぐつてこた

「当たらぬ……なんでだよお……」

一発も当たらない……」のままじやく

「……イヤだ……」

脳裏に浮かんだ不吉な単語を振り払う

相手に狙いを定める ロックマークーが動く

相手を捕らえた事を知らせる 引き金を引く

……カチンと 空々しい弾切れの音が響いた

「……あ……あ……」

「どうする…? どうする…? どうする…!…?」

あと残っているのは……そうだ… ミサイル!

ミサイルならアイツにも効くはず!

ディスプレイを叩いてミサイルを選択する

視線を上げて そして絶望に悲観した

視界が 赤と黒の2つの色で覆われていた

「しまつ…………！」

そのまま地に押し倒される

それを退かそうと必死に足掻く

カメラに映ったのは 奴の光る目

そして 振り上げた左腕とブレード

「……あ……や……」

死に魅入られた瞬間 手足が震え 体が動かない

あとは 左腕が降りて 刺されて それでオシマイ

この予想は外れなかつた 赤と黒の左腕が降りてきた

目を閉じる 視界が暗くなる 納分 きつとのまま

オカシイ 嫌でも浮かんだ最後の結末

それが いつまで絆つてもこない

そつと目を開けてみる

光が飛び込んでくる 生きてる

外を見る 状況が見えてくる

驚きに悲鳴にも似た声を上げてた

確かにブレードが突き刺さつていた

刺されていたのが赤と黒のACIで

刺していたのは鈍色のACIだった

「どういひ……」

状況が掴めない 「これは……なに?」

混乱する頭 そこに飛び込んで来る一つの声

「あんまり手間を取らすな」

それは オッサンの声だった

「……え？……え？？」

もしかして…助けられた…？

鈍色のACはブレードを引き抜くと

『さて……』 と言つて振り返る

視線の先には最後の赤と黒のAC

いつの間にか傍観者になっていた

鈍色のACがマシンガンを撃ちながら赤と黒のACに迫る
だが赤と黒のACは当たり前の様にその銃弾の雨を躱す
今度は赤と黒のACの動く先に マシンガンの予測射撃
被弾した赤と黒のACの足が止まった

そこに鈍色のACがミサイルを2発撃ち込む

撃つと同時に鈍色のACがブーストダッシュ

それを赤と黒のACはグレネードを構え迎える

グレネードが放たれる直前 鈍色のACが弾けた

OBを発動して一気に赤と黒のACとの間合いを詰める

放たれたグレネード弾の脇を抜けながら

鈍色のACはマシンガンの連射

被弾 被弾 被弾 被弾

仰け反る赤と黒のACに 鈍色のACがブレークを振り上げる

驚嘆した 赤と黒のACがカウンターのブレークを振った

これは躲せない！？ 当たる？！

その予想は外れた 動きを読んでいたかのように

鈍色のACは 赤と黒の刃をやすやすと躲してみせた

そのまま鈍色のACは 赤と黒のACの背後を取る

マシンガンを相手の背に押しつけて撃つ

逃げられる距離ではない 射程0の連射

そして マシンガンを撃ち込んだ場所に

今度はブレードを突き刺した

赤と黒のコアから火花が上がる

そのままヒザをついて崩れ落ちた

鈍色のACは それを見届けると

後ろを振り返って歩き出した

だが 赤と黒のACが動いていた

膝をついたまま 右手がゆっくりと動く

後ろを向いたまま 右手がゆっくりと動く

グレネードを その砲身を構えた

「後ろ……」

咄嗟に叫ぶ その声と同時に鈍色のACが振り返り

赤と黒のACに向けマシンガンを構え そして撃つ

マシンガンは幾数もの薬莢を飛ばしながら

赤と黒のACを鉄屑へと姿を変えていく

火花を散らし 体が仰け反り 動きが止まる

その最中 赤と黒のACが最後の一撃を放つた

絶叫の様に 雄叫びにも似たグレネードの轟音

それと共に 赤と黒のACも 炎を上げて沈んだ

全ての赤と黒のACを 文字通り一人で倒した男
その傍らで佇んでいた 歯を食い縛りながら

「……なんで」

悔しかった 情けなかつた

自分の今の実力なら 誰が来ても敵じやない

そんな事を考えて そして何も出来なかつた事実に

「……なんでアンタは あんなのと戦えるんだよ」

それは ひがみ だつたのかも知れない

「……なんでアンタ倒せるんだよ！？ なんで！？」

今まで自分一人で生きてこれた 戰つてこれた

「ロックだつてちゃんとしたし……狙いもつけた……

見てよこのプラズマライフル！ 高威力の最新型なんだ

ACに乗つてれば何だつて出来た 人よりも上手く操縦できてる

「でも当たんなかつたんだよ……なんで……なんで……」

声が詰まる 涙で視界が歪み 上手く話せない

自分は強いと叫び血負が 悉く崩されていった

「……ボウズ」

今まで沈黙していた男が 口を開いた

その口調は静かだが 圧倒されていた

「お前 戦いを何だと思つてる?」

「……な……何つて……」

「性能が良ければ強いのか? 威力が高ければ負けない?」

「ああー・やうやくー・」

「狙いをつけた 狙いはつけた! ロックオンした それでも当たらぬだと?」

「やうだよー 狙いはつけた! ロックもした!」

ちゃんとロック表示も点いた あとは撃てば当たる筈なの元

もつとFCUが壊れてたんだ……でないと……こんなことには……

「バカだろ? お前?」

オッサンは小さく鼻を鳴らした

それに頭にキテ怒鳴りつとして

「ECSが壊れてたつて？」

オッサンは馬鹿にした口調で続けた

「やうじやないか！　さうに決まって……」

「ECSに……どぞ撃つても良いくですよ？」

なんて言わないとお前は撃てないのか？」

それが当たり前だ　それがACを操ることだけ

そつと返そつとして　でも言葉が出なかつた

「弾を当たきや先を読め　それでも当たらぬなら当たるまで近付け」

「……でも……そつとは…」

「近くても当たらなかつた？」

「ああ……」

「お前のやの頭はなんだ？　耳は？　耳は？

機体の左手はなんだ？　右手は？　足は？

ただの飾りか？ 止まつてなきや 当たらないか？

「違ひ……」

「だったら使え 相手の動きを見ろ 音を聞け

機体が弱けりや 頭を使え 機体が良けりや 腕を磨け

相手だって生きてんだ 黙つて当たつてくれる訳無いだろ？」

唇を噛む 何も言い返せない

自分は機体を操つてたんじやない

機体の性能に甘えていただけだった

その時初めて思い知らされた

「当たる ジゃなくて 当てる 自分の意思でだ」

「…………自分の…………意思で？」

「ああ 自分の意思でだ 戰況を読め 読んで支配しろ

お前がお前の力で 戰場をコントロールするんだ」

「戦況を…支配…」

「そつだ そして機械に頼り過ぎるな」

「……頼るなつて……でも…」

「もしお前が死んでも 機械は責任を取っちゃくれねえぞ?」

それは機械を言い訳にするなつて事か

自分の意志で自分が戦つて 自分の意志で殺せ

つまりやつ言つ事なんだろ?

「死にたくなかったら 腕を磨け」

オッサンの言つことは確かにそうだ

正論だ 理屈は分かる その通りを

「……でも……怖いよ……」

さつきの光景を思い出していた

田の前まで迫つていた死を

「アンタは怖くないのか?!

こんなバケモノみたいなのと戦つて

死ぬかもしれないんだぞ!?!?」

気がつくと 体が震えていた

「…アンタ…怖くなえのかよ…」

自分の体を押おさえたその手も 震えを止める為に

でも 押おさえたその手も 震えで止めていた

「……そりゃ怖いや」

沈黙のあとで オッサンがそりゃ言いつた

「下手したら死ぬんだ そりゃ怖い」

「…アンタ…でも…？」

「勿論」

意外だった あんだけ強いのに怖いと言いつ

臆面も無く怖いものを怖いと口にした男が

「でもな 死ぬかもしれないからって

ナニもしないんじゃ どのみち死ぬぞ？」

「……だつたらどうすれば……」

オッサンは 「簡単や」と笑わらった

「死にたくないけりや 戦えば良いいんだよ」

「でも」 それにおも食い下がる

「……諦めたりとか……しないのか？」

「諦めるへ。」

「機体が動かなくなつたりとかしたら……」

「なるほどね」 オッサンは苦笑の声を漏らした

「もうなつたら アンタだつて諦めるだろー。」

オッサンは溜息を吐いた 駄々つ子に困つた親の様に

「ボウズ 良い事教えてやるつか？」

「……良い……事？」

それに頷く 「聞きたい」 そつ告げる

「戦いつてのは？ もうダメだシー？ つて所からが本番なんだよ」

その言葉の意味が分からず首を捻る

もひダメなら もひでもひ終わりじゃないか

でもオッサンは それは違うと首を振った

「どんなに機体がズタボロでも 動くんなら戦つ

戦えるなら勝つ それが レイヴンだ

それに納得できなくて 口を開きかけたら

オッサンが言った 「警告音が鳴るだろ?」

機体があと少しで機能停止するトコまで行くと

コックピット中に警告音が鳴り響く その事だらつ

「…………うん

あの音は嫌いだ もう 何も出来なくなるから……

「あの警告音が ホントの戦いの合図だ」

でもオッサンは 自分の考えとはまるで正反対だった

思わず目を丸くして 素っ頓狂な声を上げてしまった

「…………あ…………図々…………でも…………」

「わざから本気を出せるよつになつたら一人前

「本気…………?」

意味が解らなかつた そこまでなつたら 後は死ぬだけ

そこから本番だなんて 無駄な足掻きなだけじゃないか

そんな考えを見透かされたように オッサンが笑った

「なに笑つてんだよー！」

オッサンは 「わりいわりい」 と笑い混じりで謝罪の言葉

それに少し腹が立つ 何だか子供扱いされたみたいでムカついた

「今は解んなくとも 生きてりやそのうち解るよ」

飄々としたオッサンの物言いに 毒気が抜ける

その感じが何だか懐かしい 既視感を覚えていた

不思議な安心感 いつの間にか腹立ちもなくなつてた

「……そんなもん？」

「そんなもんだ」

「……そつか」

「そうだ」

ホントに 解る時が来るんだろうか……

「それよりも今は 腕を磨け」

不意にオッサンの眞面目な聲音に

思わず居住まいを止めじていた

「死にたくないりや 強くなれ」

「強くつて……どいまで?」

その質問に オッサンは言葉を止めた

何だか悩んでこるよしひこと感じられた

それもつかの間 オッサンは笑いながら

「ソイシラを軽く倒せるよしひとなるまで」

わざわざオッサンが破壊した赤と黒のA/Cを指した

「……ソイシラを?」

「やうすじや 強くなつたつて証拠だ」

それはオッサンにしてみたら 「冗談交じりだつたんだらつ

確かに「コレを倒せりや強くなつたつて分かるだらうナビ…

「コマイシに田に田に」と証なんだと
「」

「え?」

「まつ 早死にしたくなかったら氣をつけるんだな

何事もやうに過ぎない様に そう付け加えてよこした

「……あの……そのイレ……何とかってなに?」

「あ? あ…それはな…」

オッサンは何故か照れくさううだつた

喋る言葉をじもじせながら 「強い奴の事を」 と言つた

一瞬 いつか聞いた言葉と 同じ言葉を思い出す

もう 2度と会えないであらつ あの人の言葉を

「ん? どうした?」

「……何でも無い」

バレなことひいて 手を擦る

不意に 小さくホールサインが鳴いた

自分のかと思つて見てみたけど違つた

オッサンが言った 「悪い」

「どうした? ? ネル?」

「どうした? ? ネル?」

続いて女性の声が聞こえた

「敵の反応の無い今のうちに 離脱して下さい」

それにオッサンは「解った」と告げて通信を切つた

「……今は？」

それにオッサンは得意げに答えた

「ああ ?ネル・オールター? 最高の パートナーオペレーターだ」

「信頼してるんだ」

オッサンは照れくさそうに 「まあな」と答えた

「それじゃ 生きてたら またな」

それに頷く 「……うん…また」

鈍色のACGが背を向けて そして走りだした

「……必ず」

それから数年後 火星に別れを告げ 地球に下りた
?アリーナ?にも登録し 晴れてランカーになつた

……そこで彼女に出会つた

「初めまして」

彫像のよつこに整つた 氷像のよつこに冷たい

「君の名前は？」

「二コともしない 無表情で無感情な女性

「私は二ーナと申します」

地球で出会つたこの女性が 最高のパートナーになるのか

「貴方が死ぬまでのお付き合ひですが よろしくお願ひします」

最悪のパートナーになるのか 今はまだ解らない

「…………まあ…………ヨロシク」

でも 願わくば :

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7876z/>

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N - 過去編

2011年12月25日12時51分発行